

令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和7年4月15日(火)

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立台場小学校

【国語科】

1 結果の概要

- どの学年も、目標値に近い正答率である。しかし、学年によって差が見られる。
- 目標値と比較すると、基礎的な力よりも活用力の数値が高い。しかし、点数で見ると基礎的な力の方が正答率は高い。
- 10～20%の児童は最後まで問題を解ききることができていない。時間配分もふくめ、最後まで解ききれるように指導する必要がある。

2 具体的な課題

- (1) 「記述」の誤答は少なく、未記入での提出が多い。
- (2) 「書く」はどの学年も目標値に到達していない。
- (3) 「言葉の特徴や使い方」は、全学年数値が低い。誤答が多い。

3 課題の原因として考えられること

- (1) 記述の問題は、問いの最後に設定されている。誤答のパターンとして、空欄が多い。最後まで解ききれていない児童が10～20%程度いるため、誤答判定になり、正答率が下がっている可能性がある。書けている場合は、正答していることが多い。
- (2) 漢字は読めているが、書きの定着に個人差がある。
- (3) 主語述語などの文法を理解したり、文の構成を意識して会話や文章作成をしたりする経験が不足している。

4 課題解決のための方策

- (1) 考えを記述する問題の形式に慣れさせる。学習内容以外にも、授業の最後に「振り返り」を行い、自分の考えや意見を書く機会を多く設ける。
- (2) ことのはだけでなく、漢字ノートなどを用いて書く量を増やす。校内で、宿題の形式や量を見直す必要がある。
- (3) 言語事項を朝学習の課題に設定する。問題文の主語述語を全体で確認し、何を問われているのかを理解して取り組めるように日々積み重ねる。さらに、読書週間を活用し読書に積極的に取り組ませることで、文章に慣れ親しませる。

5 次年度の数値目標

すべての学年の校内平均正答率が、目標値以上となるようにする。

【社会科】

1 結果の概要

- ・ 5学年はどの区分も目標値に達しているが、6学年は目標値に達していない区分がある。
- ・ 4学年はどの区分も目標値よりも下回っている。
- ・ どの学年も「基礎」区分の定着が低い。

2 具体的な課題

- (1) 四方位や地図記号、都道府県や世界の国々の位置など地理的理解が不十分である。
- (2) 資料の中でも年表やグラフの読み取りに課題がある。
- (3) 資料から読み取った内容を実生活と関連付けて考えて表現したり、理解したりすることに課題がある。

3 課題の原因として考えられること

- (1) 調べ学習を中心とした授業展開の中で知識の定着を図る時間を取り入れることができていない部分がある。また地図帳や地図アプリの活用ができていない。
- (2) 年表やグラフなどの資料の読み取り方が身に付いておらず、どのように読み取ればよいのか分からない。
- (3) 資料から分かることだけで終わってしまうことや基本的な知識が確実に定着していないことが、資料や実生活を関連付けて考えるところまで至らない原因になっている。

4 課題解決のための方策

- (1) 地図記号や都道府県や世界の国々の位置など、基本的な知識について社会科授業の始めに反復的な学習を5分取り入れ、定着を図る。取り扱う単元で出てくる地名については授業内に地図帳や地図アプリを活用して視覚的に地理的理解ができるようにしていく。
- (2) ICTを活用して、年表やグラフなどの読み取りに必要な視点を指導する。また、自分が調べたい内容はどの資料を見れば分かるか考える時間も取り入れていく。
- (3) 調べ学習では資料から読み取ったことだけでなく、読み取った資料を基に自分が考えたことを書くようにさせていくとともに、自分の考えを表現する考察の場を設定する。

5 次年度の数値目標

すべての項目の校内平均正答率が、目標値以上となるようにする。

【補助資料】

① 基本的な知識（地図記号・都道府県・世界の州・地図の見方・地球儀の見方）の定着を図るための例

- ・ フラッシュカードを用いて地図記号や都道府県を覚える。
- ・ 授業中に出てきた地名は、Google earth や地図帳を活用して位置等を確認する。
- ・ 遊んで学べる世界地図・日本地図パズル、日本地図・国旗クイズアプリの活用をする。

② 年表やグラフを読み取る力を付けていくための例

- ・ 折れ線グラフは、変化を表していることが多い、棒グラフは比較していることが多いなど、資料が表す特徴を教える。
- ・ 資料の読み取りの際に、一つの資料のみを提示せずどの資料から読み取れるか考えさせる時間も取り入れていく。
- ・ 資料から読み取れること⇒読みとった資料から考えられることの2段階で意見を書かせていく。

【算数科】

1 結果の概要

- ・ 2, 3, 5学年はどの区分も目標値に達しているが、4, 6学年は目標値に達していない区分があり、特に、「基礎」の区分は低い値の学年が多い。
- ・ どの学年も平均点を取る児童が多く、正答率が山なりであるが、学年が上がるに連れて山の頂上が高い値寄りになる。
- ・ 計算の仕方、答えの求め方などの基礎的な学習が定着していない。

2 具体的な課題

- (1) 基礎的な知識・技能が定着していない。
- (2) 四則計算のミスが見られる。
- (3) 学年が上がるにつれて、正答率が下がる。

3 課題の原因として考えられること

- (1) 基本的な知識・技能が身に付く繰り返しの学習が不足している。
前学年や前単元までの既習事項の定着が弱い。
- (2) 計算ミスをしていることに気が付かない。
検算の仕方が定着していないため、検算をする習慣が身に付いてない。
- (3) 高学年ほど複雑かつ高度な問題になるため、児童の課題が様々である。

4 課題解決のための方策

- (1) タブレット端末（ドリルパーク）を活用し、補充問題を行う。
未定着の学習に適宜立ち返れるように、個別のプリントを活用し、つまずきが積み重ならないようにする。
- (2) たしかめの有用性を感じさせ、検算の仕方を指導し、習慣化させる。
学習時の練習問題やテスト直しをする中で、たしかめをする必要性を得させ、仕方を指導し、検算をする習慣を身に付けさせる。
- (3) 課題を明確にした学習内容を検討して、習熟度別学習を実施する。
個々の課題を把握し、個々に合ったフィードバック学習や予習・復習を取り入れながら授業を進める。より丁寧に習熟を確認しながら指導する。

5 次年度の数値目標

すべての項目の校内平均正答率が、目標値以上となるようにする。

【理科】

1 結果の概要

- ・すべての学年、すべての区分で目標値を下回っている。
- ・基礎基本の問題の正答率が低い。

2 具体的な課題

- (1) 基礎基本の力が十分に定着していない。
- (2) 資料を読み取る力が弱い。
- (3) 結果から考察したり他の現象と結びつけたりする力が弱い。

目標値を下回る単元の中でも、数値から以下の単元が特に定着が弱いと考えられる。

4年「身近な自然の観察」「こん虫のからだのつくり」「じしゃくのせいしつ」

5年「水のすがた」「物の体積と温度」「動物のからだのつくりと運動」

6年「電流のはたらき」「天気の変化」「魚のたんじょう」

3 課題の原因として考えられること

- (1) 基本的な用語や現象の名称などの理解が不十分である。
- (2) 資料を正しく読み取り、聞かれていることを理解し答える力が十分に身に付いていない。
- (3) 問題に沿った考察ができていなかったり、他の現象と結び付けたりすることができていない。

4 課題解決のための方策

- (1) 授業の始めに前時を振り返ったり単元の終わりに復習したりして定期的に基本的な用語等を復習・確認し、必要な知識を確実に身に付けさせる。
- (2) 資料から分かること、聞かれていることなどを整理して考えさせる。
- (3) 結論は自分の言葉で導出させ、表現させる。その際、問題を振り返って必ず使うキーワードを確認するなど、視点からずれないようにする。また、実態に応じて穴埋め形式などにする。
- (4) 毎単元、学んだことを日常生活に結び付けて考えさせる時間を取る。

5 次年度の数値目標

上に挙げた単元の校内平均正答率が、目標値以上となるようにする。

【英語科】

1 結果の概要

- すべての項目で目標値を6ポイント以上上回り、学年相応の基礎的な英語の力が身に付いていると考えられる。

2 具体的な課題

- (1) アルファベットの読み（聞く）→「活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を身に付けている。」
- (2) 英作文→「例文を参考にしながら、自分のことについて簡単な語句や基本的な表現を用いて書いている。」
- (3) 読むことに課題がある。→アルファベットは大文字を読むことに課題がある。

3 課題の原因として考えられること

- (1) 5年生の段階では、アルファベットを単体で書く・読むという時間が限られてしまうため、アルファベット（特に大文字）を習得できていない児童も多い。
- (2) 授業では、単語や文を書くことはタブレットで取り組むことが多いため、英語で書くということに苦手意識をもつ児童が一定数いる。
- (3) 自分の思いを文にして表現することが苦手な児童が多い。

4 課題解決のための方策

- (1) チャンツやアクティビティなどを通して、単語の理解を深める活動を取り入れる。1年生から系統的にアルファベットの学習を取り入れ、大文字や小文字のアルファベットや単語を読む学習に繰り返し取り組む。
- (2) 教科書のワークシートや単元テストなどを活用して、引き続き簡単な単語や文を書く活動を取り入れる。
- (3) 5年生の段階から少しずつ書く活動を取り入れていくことにより、英語を書くことに対する苦手意識を減らせるようにしていく。
- (4) 引き続き、スピーチを続けることにより、英語で表現することに慣れていく。

5 次年度の数値目標

すべての項目の校内平均正答率が、目標値以上となるようにする。